

324. 植遺跡の発掘調査成果

—首長の姿が見える古墳時代大集落の発見—

1. はじめに

植遺跡は甲賀市水口町植に所在する、滋賀県を代表する古墳時代の集落遺跡のひとつです。柏木地区の県営ほ場整備(経営体育成基盤)事業に伴い、平成13年度から平成14年度にかけて発掘調査を実施しました。平成13年度の調査では、排水路部分の調査(710㎡)を行いました。その結果、竪穴住居16棟や、鎌倉時代の瓦器類が大量に出土した井戸1基などが見つかリ、調査地内に古墳時代や中世の遺構が埋没していることがわかってきました。平成14年度の調査では、水田面工事部分の5,500㎡について調査を実施し、古墳時代の掘立柱建物17棟・竪穴住居103棟・甕棺墓4基、平安時代の掘立柱建物2棟、鎌倉時代の遺物を含む柱穴・近世の井戸1基などが見つかリ、遺跡の中心となる時期は、5世紀中頃から7世紀前半頃までの、古墳時代であることが明らかになりました。

発掘調査で出土した遺構や遺物の整理調査を平成14年度から平成16年度にかけて行い、その成果を『植遺

跡』としてまとめ、刊行しました。

植遺跡を特徴づける遺構としては、5世紀における大型倉庫建物としては全国では6例目の発見となった大型倉庫建物群(SB05・SB08・SB09)や、100棟を超える竪穴住居群などがあげられます。今回はこれらの遺構を中心に報告します。

2. 植遺跡の立地

植遺跡は、鈴鹿山系に源を発する野洲川と植川が形成した水口盆地に位置しています。水口盆地は、滋賀県東南部地域の中心地であるとともに、交通の要衝といった性格ももち合わせているといえます。このことは、盆地内を国道1号とこれに直交する国道303号線が通過し、京都府南部地域と滋賀県東部地域を結んでいることや、伊賀地方へ抜ける国道4号線(草津伊賀線)の分岐点であることなどからもうかがえます。この水口盆地のもつ地域性は、古代には、地域の首長墓である泉塚越古墳がこの地に築かれていることや、江戸時代に将軍が上洛する際に水口城を宿营地としたことなどからも理解できます。



図1 植遺跡の位置図

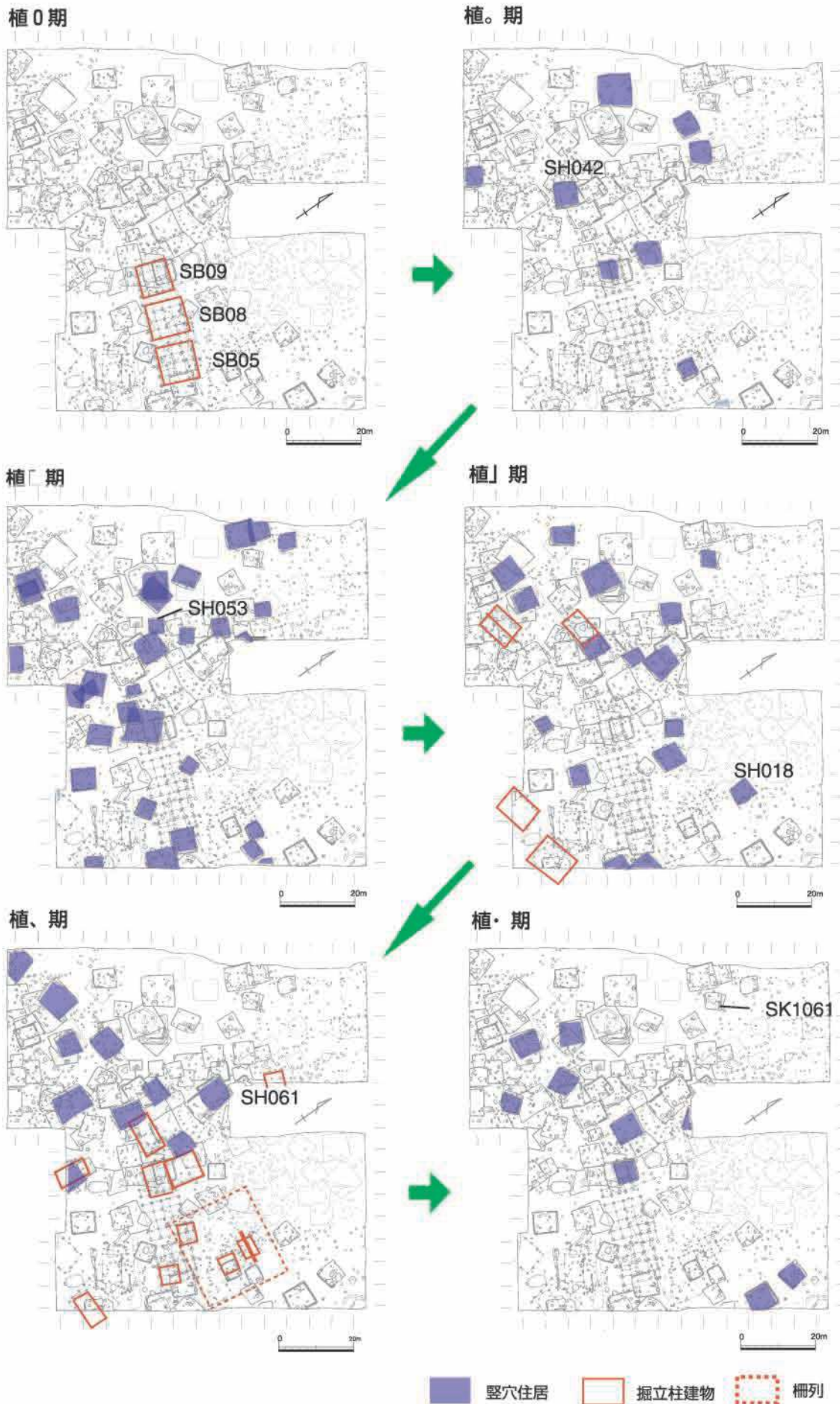


図2 植遺跡の遺構変遷図

3. 周辺の古墳時代の遺跡

植遺跡の南西側1km地点の泉に造営された、首長墓と考えられる泉塚越古墳は、平成13年度の発掘調査の結果、5世紀後半頃に造られた埴輪と葺石を完備した一辺60m弱の方墳であることがわかりました。また、昭和36年の土砂採取によって、全国的に見ても十数例しかない四方白金銅製眉庇付冑1領のほか、仿製内行花文鏡1面、碧玉製勾玉1個、三角板革綴短甲1領、三角板鋌留短甲・頸鎧・肩鎧1セット、鉄刀・鉄剣類10本以上、長頸式鉄鎌10本以上といった、副葬品が多数出土しています。

植遺跡の西側1.5km地点に造営された園養山古墳群は、横穴式石室を主体とする群集墳で、本格的な発掘調査は実施されていませんが、現状では128基の古墳が確認されています。6世紀中葉から7世紀前半にかけて築造されたものと考えられています。

植遺跡の北西1.7km地点に所在する泉古窯跡群は、採集された須恵器の年代観から5世紀末～6世紀初頭を中心とする時期に操業していたことが知られ、また、この古窯群で作られた須恵器が、植遺跡に供給されていたことが発掘調査によって明らかになっています。

4. 平成14年度の発掘調査の概要

これらの遺構は、出土した遺物の年代観や各建物の主軸方位などにより、6つの時期に分けられ、時期の古いものから挙げると次のようになります。

①遺跡の成立期で大型倉庫群が営まれる頃(植0期。5世紀中頃)、②竪穴住居が造られ始める頃(植I期。5世紀後半～末頃)、③大規模な竪穴住居集落を形成する頃(植II期。5世紀末～6世紀中頃)、④大型住居建物が造られ「首長居館」的傾向を示す頃(植III期。6世紀中頃)、⑤「首長居館」とも呼び得る建物群を営む頃(植IV期。6世紀中頃～後半)、⑥再び竪穴住居による一般の集落を営む頃(植V期。6世紀末～7世紀前半頃)。

5. 大型倉庫の発見

大型倉庫群(SB05・SB08・SB09)は、柱通りと南辺を揃えて3棟並んだ状態で見つかりました。植遺跡では、大型倉庫群が造られる5世紀中頃以前の遺構や遺物が全く見つかっていないので、それまで未開であった高台を選んで、倉庫群が建てられたことがうかが



図3. 大型倉庫群イメージ図(右からSB05・SB08・SB09、神保忠宏作製)



写真1. 大型倉庫群 (右からSB05・SB08・SB09)

えます。大型倉庫の規模は床面積で表現すると、50～70㎡級の規模で、その頃の通常の大きさの倉庫に比べ、2倍～3倍の大きさとなっています。現在残った柱穴の深さから推測すると、高さの違った基壇の上に建てられた可能性が考えられ、柵などの区画施設を備えていないことがわかりました。

以下、それぞれの倉庫について詳しく説明します。

SB05

東西4間(8.4m)・南北4間(8.2m)の規模で、床面積は68.88㎡です。柱間は2.0m～2.1mの間隔で、ほぼ均等に掘られていました。側柱の掘方は、0.8m～1.1m程度の不整形をしていて、深さは0.2m～0.5mほどでした。側柱には、直径30cmの円形の柱を立てていたことがわかりました。屋根の形は、側柱の外側に棟持ち柱をもっているの、切妻屋根に復元されます。

SB08

SB05の西側1.9mの地点に、SB05とほぼ同じ規模で建てられた総柱建物です。東西4間(8.2m)・南北4間(8.2m)の規模で、床面積は67.24㎡です。柱間2.0m～2.1mの間隔で、均等に配置されています。側柱は0.8m～1.1m程度の不整形の掘方で、深さは0.4m～0.5mほどでした。屋根の形は、内部通し柱の掘方が側柱に近い深さをもつことから、内部通し柱に棟

をもたせる、寄棟造りもしくは入母屋造りの屋根に復元されます。

SB09

SB08の西側1.9mの地点に、建物の南辺をそろえて建てられた総柱建物です。SB05・SB08に比べると、一回り小さく建てられています。東西4間(7.1m)・南北4間(6.9m)の規模で、床面積は48.99㎡です。柱間は1.7m～1.85mと均等に配置されています。側柱は0.6m～0.8m程度の不整形の掘方で、深さは0.4m程度でした。側柱の柱痕は、直径30cmの円形で、SB05とSB08と同じ大きさの円柱を使用していたことがわかっています。屋根の形は、内部通し柱をもたないことや、側柱の外側に棟持ち柱がみられないことなどから、単純な切妻屋根に復元されます。従って、この3棟の倉庫建物は屋根の形状が異なっていたものと考えられます。

6. 103棟の竪穴住居

竪穴住居は、調査区のほぼ全体で103棟を確認しました。これらの住居は、建替えなどのため、住居の下により古い住居が重なりあっている状況も多く見られました。また、出土した土器の年代観によって、大型倉庫群廃絶直後の5世紀後半頃から廃絶する7世紀前半頃まで途絶えることなく営まれ続けていたことがわかっています。住居の大きさは面積で比較すると、最小のものが約7㎡で、最大では約55㎡のものまでありました。一般的な大きさは1辺5mの約25㎡のものであったようです。

次に、竪穴住居などの詳細を紹介します。

SH012 (竪穴住居) (写真2)

調査区の東隅から見つかった、5世紀後半に営まれた小型住居です。大きさは、東西4.05m・南北3.65m・深さ0.29mで、竪穴住居内の設備として、カマド・貯蔵穴を確認しています。この住居では、廃絶時に土器類や拳大～人頭大の礫石を大量に投棄して、祭祀行為が行われたようです。また、焼土や炭化物もこれらの土器と石の間にたくさん混じって見つかります。

SH018 (竪穴住居) (写真3)

調査区の東側から見つかった、6世紀中頃に営まれた中型の標準的な住居です。検出した大きさは、南北4.9m・東西4.42m・深さ0.21mで、東にカマドを持ち、東南隅に貯蔵穴がつくられています。屋根を支える柱穴は、直径30cm・深さ0.6mのものが4本見つかります。

SH042 (竪穴住居) (写真4)

調査区の北西側で見つかった、5世紀後半頃に営ま

れた中型の住居です。検出した大きさは、東西5.54m・南北5.10m・深さ0.28mで、竪穴住居内の設備として、カマド・貯蔵穴を検出し、壁溝・支柱穴・入口状施設の構造も確認しています。この住居では、カマドの燃焼部に、脚裾部を打ち欠いた土師器高杯を正位置に置き、土師器甕にかぶせた状態で、見つかっています。この住居でも、廃絶時に土器類や礫石を大量に投入する祭祀行為が行われていたようです。

SH053（竪穴住居）（写真5）

調査区の中央付近で見つかった、5世紀末から6世紀前半頃に営まれた小型の住居です。検出した大きさは

は、東西3.36m・南北3.18m・深さ0.18mで、竪穴住居内の設備は、カマド・貯蔵穴を確認しています。この住居では、廃絶時に、カマドの焼成部の中央に、粘土塊を据えたあと、その上に完形の土師器の高杯がさかさまに置かれた状態で見つかっています。

SH061（竪穴住居）（写真6）

調査区の中央部付近で見つかった、6世紀後半頃に営まれた中型の竪穴住居です。検出した大きさは、東西5.74m・南北5.82m・深さ0.24mで、住居内の施設としては、カマド・貯蔵穴を検出し、壁溝・支柱穴の構造を確認しています。この住居では、住居東壁のほ



写真2. 竪穴住居 SH012遺物出土状況



写真5. 竪穴住居 SH053のカマド



写真3. 竪穴住居 SH018全景



写真6. 竪穴住居 SH061のカマド



写真4. 竪穴住居 SH042のカマド



写真7. 甕棺墓 SK1061

は中央部で、壁に直行して取り付くカマドが良好な状況で見つかり、焚口部前面からは焚口天井部にあったと考えられる、扁平(0.6m×0.32m×0.16m)な花崗岩系石材が見つかりました。

SK1061 (甕棺墓) (写真7)

SK1061は、長胴甕2点を合わせ口としたもので、合わせ口部は、別個体の甕の破片で覆われていました。棺に使われた二つの長胴甕の外側には、煤が付着していて、実際に火にかけた実用品を再利用して使っていました。

これらの甕棺墓がつくられた時期は、6世紀後半頃から7世紀前半頃であったようです。滋賀県内で甕棺墓が集落内で発見される地域は、大津市北郊地区の穴太遺跡・滋賀里遺跡などがあり、文献資料や、横穴式石室の形態・発掘された大壁造建物などの遺構から、渡来系氏族が実際住んでいた地域だということがわかっています。このことから考えると、植遺跡においても渡来系氏族が生活していた可能性があるといえます。

7. まとめ

床面積が50m²を超える5世紀代の大型倉庫群は、大阪府大阪市の法門坂遺跡・大阪府豊中市の蛭池東遺跡・和歌山県和歌山市の鳴滝遺跡・奈良県御所市の南郷遺跡・奈良県天理市の布留遺跡が知られています。これらの倉庫は、畿内および周辺地域のみに分布することや、物資の掌握・管理を目的としていずれも交通の要衝あるいは生産の拠点につくられているということが共通点として挙げられます。

植遺跡で今回みつかった大型倉庫も畿内に接する地域に位置し、琵琶湖・野洲川の水上交通路と、鈴鹿峠を越えて伊勢湾地方に抜けるルートおよび倉部道を経て伊賀へ抜けるルートを意識して造られていることを考えると、これらの倉庫群と同じ意義づけができそうです。また、植遺跡の北西約1km地点には、植遺跡の倉庫群とはほぼ同時期に築造された泉塚越古墳が造られていることから、この倉庫群は泉塚越古墳を造った首長層によって運営・管理されたものと推定されます。

次に、見つかった103棟の竪穴住居についてふれると、おおそ100年強、150年弱の期間に営まれたもので、竪穴住居の耐用年数を10年と見積もると、同時期に10棟程度ずつ存在し、10回程度の建替えをしたものと考えられ、極めて集住性が高い集落であるといえます。また、廃絶時に大量の土器を礫石とともに投棄した住居や、カマドの焼成部および焚口に土器を据えた様相を示す住居などが見つかり、古墳時代の住居内における祭祀の貴重な事例となりました。



写真8. 発掘調査区の全景

なお、平成14年度に行った発掘調査範囲のうち、遺跡の主要範囲に関しては、遺跡保存のため埋め戻され、地中に現状保存されています。地元の方々のご協力に感謝するとともに、この遺跡が後世に守り伝えられ、活用していただければ幸いです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 田中咲子)

<主な参考文献>

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006.3『植遺跡』ほ場整備関係(経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書32-3
- 細川修平2003.10「倉庫建物に見る古墳時代社会の変質」『人間文化』14 滋賀県立大学人間文化学部
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2004.3『泉塚越古墳』国道1号水口道路改築工事に伴う発掘調査報告書
- 畑中英二1995「滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討(前編～後編)」No216～218 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 丸山竜平1997「甲賀群水口町泉所在の古墳群」『滋賀県文化財だより』No.8 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 積山洋1995「近畿の大型倉庫群遺跡」『季刊考古学』36 雄山閣出版

325. 植城遺跡の発掘調査成果

—よみがえる甲賀武士団の城—

1. はじめに

植城遺跡は、甲賀市水口町植地先の植集落内に所在する中世（室町～戦国時代）の甲賀武士団の城館跡として周知されていた遺跡です。従来から、集落内を巡る堀や土塁の存在が確認されていましたが、近年、宅地開発等で土塁が削平され堀が埋められるなどして、現在では、伝お局屋敷の土塁や吉山神社裏に残る土塁・堀にしかその面影をしのぶことができなくなっていました。ここで、平成16年度には場整備関係（経営体育成基盤整備事業）として農業用道路改良工事が計画されましたので、工事に伴う事前調査として発掘調査を実施しました。調査終了後の平成17年度に整理調査を実施し、その成果を発掘調査報告書としてまとめ刊行しましたので、以下にその成果を報告します。

2. 調査の結果

発掘調査は、平成16年度から実施しました。調査の結果、対象地の北1/3の堀状の窪地から、ひとつの郭を囲む、幅約4m・深さ約2mの堀跡とその両脇にあったと考えられる削平された土塁の痕跡を発見しました。堀は、土塁間の推定幅が9mを越え、土塁天頂から深さ6mもあるという巨大な薬研堀（薬研のようにV字形をした堀のこと）でした。調査区の中央部では、郭跡を発見し、建物の柱穴や溝、井戸を確認しました。さらに、調査区の南1/3では、既存道路の地下から、別の郭を囲う堀と削平された土塁の痕跡や、郭への通路と郭への入り口に当たる食い違い虎口などを発見しました。また、各調査区からは、土師器の皿や青磁の碗、天目茶碗の食器や調理具、貯蔵具などの16世紀代の遺物が出土しています。なかでも、もっとも数が多かったのは、ご当地の信楽で作られたすり鉢



写真1. 発見された堀の様子

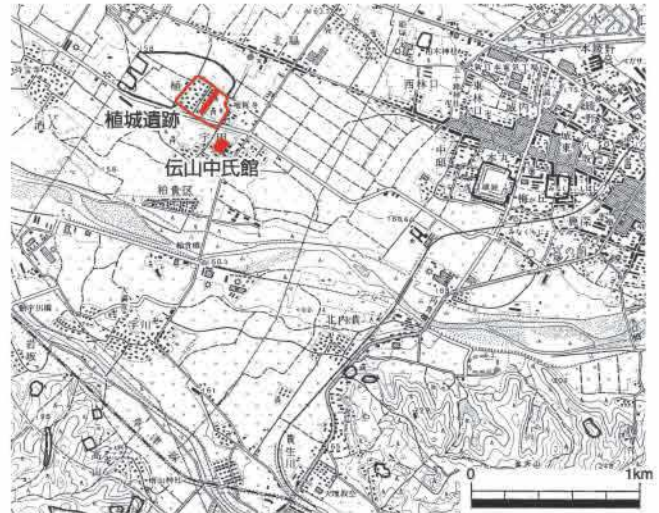


図1. 遺跡位置図

や壺、甕類でした。特にすり鉢は、室町時代から戦国時代にかけてのもっともポピュラーな調理道具として有名です。中世にあつては、さまざまな食材をこれですり卸したり、こねたりして料理がつくられていました。非常時には、これひとつをさげて戦場に行き、そのまま火に掛けて鍋の代わりもすれば井の代わりにもなるという重宝な道具でもありました。

また、その後の江戸時代以降の出土遺物から、現代までの長い時間をかけて土塁が削平され堀が埋められたといった様子もわかりました。

3. 調査成果から見た植城

植城は甲賀郡内の城にはめずらしい平地にある城です。本来、地元の有力な武士（文献史学では、在地領主・国人・土豪と呼ばれている人々）の屋敷は、平地にあり半町～2町（約50～200m）の敷地を堀や土塁で囲む方形城館（居館）と呼ばれる城として築かれます。この場合は、城館は単郭として存在し、集落に接するか、集落の中に築かれるのが一般的となっています。これらの状況は、湖南・湖北地域によく認められ



写真2. 地元説明会の様子

ます。また、これらの城館の背後の裏山に詰城として山城が築かれ一体となっている場合もあります。しかし、甲賀郡内の城郭は、山城というよりは、城館がそのまま山に築かれたようなものが多いようです。そのような中にあり、今回の発掘調査で得られた成果と現

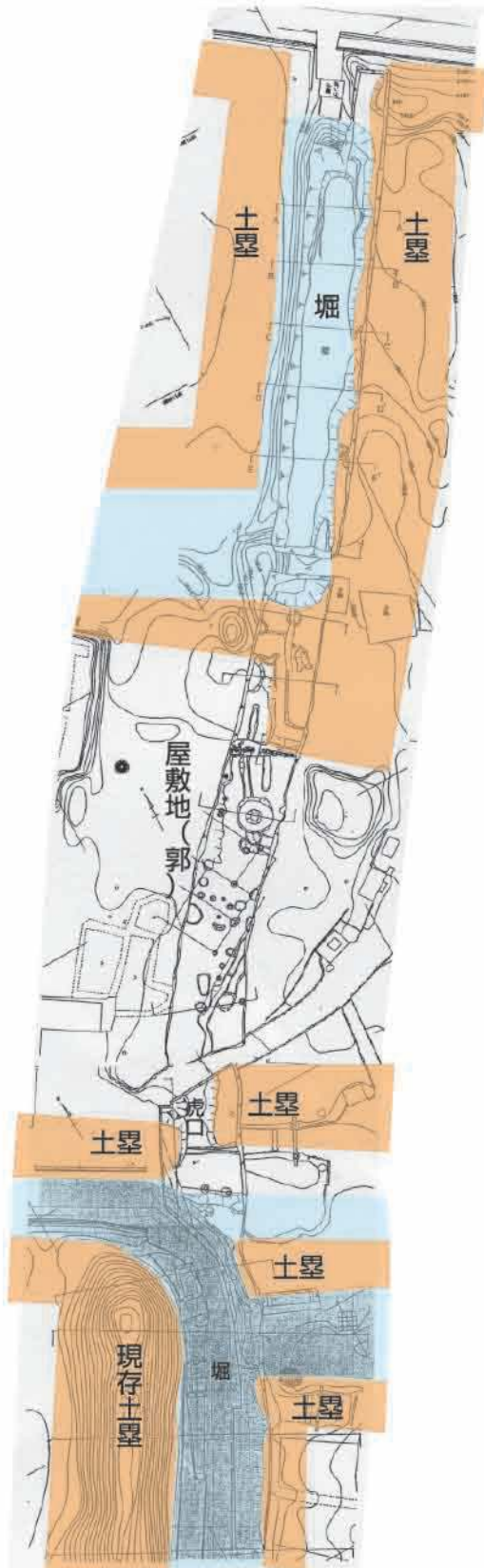


図2. 植城調査平面図

況や集落内での聞き取りとによる植城の全体像は、堀と土塁で囲まれた複数の館が寄り添いひとつに合わさってできあがった複合的な城郭(複郭)であったことが判明しました。

植城に関する資料や伝承は少なく、歴史的にこれらの城の持ち主は詳しくわかっていませんが、近接する伝山中氏館(水口町宇田)との位置関係や歴史的な位置づけから、もとは朝廷から鈴鹿警固の役を仰せついていた土山(ほんかんち)を本貫地とする山中氏が分家して、柏木御厨(かしわぎのみくりや)を所領とする過程で一族が築いた城館でなかったのではないかと考えられます。

これらの調査成果から考えられる植城の形態は、甲賀武士団はもとより県内においても類例が無く、甲賀武士団の位置づけ、城郭史や地域の歴史を考える上に置いて貴重な資料といえるでしょう。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 木戸雅寿)

<主な参考文献>

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006.3『植城遺跡』ほ場整備関係(経営体育成基盤事業)遺跡発掘調査報告書33-2
- 木戸雅寿2006.「甲賀の城のネットワーク」『紀要』19号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県教育委員会1984.3『滋賀県中世城郭分布調査2(甲賀の城)』
- 1926『甲賀郡史 上』



図3. 植城復元推定図